

### <書評> 『本屋敷古墳群の研究』

岩崎, 卓也 / IWASAKI, Takuya

---

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

38

(開始ページ / Start Page)

79

(終了ページ / End Page)

83

(発行年 / Year)

1986-03-24

## 〈書評〉

### 『本屋敷古墳群の研究』

岩崎 卓也

東京六大学の雄法政大学は、一九八〇年をもって創立百周年を迎えた。この輝やかしい節目の記念事業として、数々の調査・研究プロジェクトが組まれた。ここに紹介する福島県本屋敷古墳群の調査・研究もまた、その一環として実施されたものである。

その成果を収録して、法政大学文学部考古学研究報告第一冊として刊行された本書は、本文四三九ページ・六二図版という大冊である。その構成と内容は、左の通りである。

第一章 本屋敷古墳群の地理的環境および歴史的背景

第二章 遺跡の現状と調査経過

第三章 調査結果

第四章 本屋敷古墳群の考察

第五章 請戸川・高瀬川流域における古墳文化の展開

第六章 大化前代の浪江と染羽国造

第七章 本屋敷古墳群の諸問題

むすび／英文抄訳／前方後方墳集

右記のとおり、調査成果にかかわるモノグラフは第三章、一六三ページで終り、残余は調査成果にもとづく考察編である。しかもそれらは、助手・大学院生という、法政大学の明日を担う若手

研究者が、力を結集してまとめあげたものである。近年数多く出版される発掘調査報告書が、ややもすれば事実記載に終始しがちなことを思うとき、その半ば以上を考察にあてた本書は、出色の調査・研究報告書であると評価してよいだろう。

つぎに報告書の概要を紹介しておこう。

第一章では、本屋敷古墳群が、太平洋に注ぐ請戸川の川口から四キロほど内陸の「恰も南北を限る丘陵が最も狭まった個所の北側」に立地すること、周辺には弥生時代後期の土器が分布するが、茨城県の十王台式土器文化の波及を確実にあとづけうること、この地には前方後円墳を含む多数の古墳があるが、いずれも小規模で副葬品も乏しいことなどが述べられている。

第二章では、調査にあたり一号墳の軸線方位にあわせて、二メートル方眼のグリッドを設け、トレンチ法も併用したこと、出土遺物のランクすなわち遺構に直結すると思えるA、その可能性が強いB、その他Cの三ランクなどについて説明されている。調査主体により方針が異なる現在、こうした記述も必要である。私どもが報告書に接して一番難渋するのが、果たしてどの遺物とどれが遺構に直結すると判断されたのか、必ずしも明らかにされていないことである。その点、このランク付けは重要である。

第三章は、調査された諸遺構の詳細な記述にあてられている。

それによれば一号墳は、ほぼ東西方位の全長三六・五メートルという前方後方墳で、後方部東北にブリッジをのこす不整形周堀がめぐっていた。後方部頂には、長さ七・二六メートルの割竹形木棺が、その東西両端を粘土で固定して直葬してあった。東枕に遺

体を安置したとみてよく、竹櫛と玉類若干を伴った。このほか前方部にも箱式石棺があり、刀子二本が出土した。また墳頂および周堀内から、多種類の土師器を得た。

二・四号墳は、ともに二〇メートルに満たない方墳で、ともに不整形の周堀をもつ。埋葬施設は、二号墳に組合式木棺の疑いがある長さ三メートルほどの木棺が直葬されたらしいのに、四号墳のそれは長さ五・七メートルと四・七メートル未満の並列する二本の割竹形木棺だった。すべて副葬品は皆無に近かった。二古墳とも埋葬施設上に、埴形などの土師器が供献されていたという。

三号墳は径一二メートルほどの円墳で、墳頂には二つの箱式石棺があり、周辺に埴・皿などの土師器、また裾部には甕などの大型土器のほか、白玉を納めた臙や、滑石製勾玉もみられた。

その他の遺構中、古墳群との関連で注目されるのは、一―三号堅穴住居址である。一号址は、二号墳下から発見され、古制を保つ小型器台などが出土した。円形プランをもつ二号址は、十王台式の範疇に含まれる土器と、北陸地方的な土器との共存が注目された。一号墳に先行する三号址では、裝飾器台が特記される。

第四章は、右のモノグラフを踏まえた考察編で、内容は多岐にわたる。まず一号墳の外形が検討される。平面形に多くのチェック・ポイントを設け、それらと後方部長との相対比を集積して、関東・東北地方の前方後方墳の類型化を試みたりするが、本屋敷一号墳の系譜をたどりうるような結果は得られなかったという。論者はこれを、中央政権との直結にもとづくと考えている。

ついで東北地方における、前方後方墳を含む古墳群構成の検討

に入る。それは、この地方では丘上に立地する小型前方後方墳と方墳を主体とする古墳群と、群をなさない平地の大型前方後方墳という、二つの在り方に大別しようという結果を導く。平地立地は時期的に新しいのであろうともいう。

主体部の割竹形木棺もまた、東北一円を対象として類型化を試みた末、封土中に長大な棺を埋置するものは、塩釜式期に属する古式であるのに、地山に埋置される小型木棺は南小泉Ⅱ式期に含まれると結論づける。

この割竹形木棺に副葬される玉類も、会津大塚山古墳のような多量埋納型と、少量が散見される遠見塚古墳のタイプとがあり、本屋敷例は後者に属するとされる。

東北地方の箱式石棺は、五世紀後半から六世紀前半にかけて集中的に使用されたらしく、「政治的・軍事的な共通項をもった人々」がおさめられたとも推理している。

遺物の考察では、まず二号住居址出土土器が組上にあげられる。論者は「口縁つまみ出し壘形土器」をとりあげ、その分布を追う。そしてこれが北陸地方、とりわけ富山・新潟方面に濃密な分布をみせること、その使用が月形式期から一部高古式期に及ぶ間に限られることを強調する。その上で、関東・中部・東北地方に散見するこの種の土器を、北陸系土器と断じる。だが、北陸以外では五世紀まで下降する年代のものは見当らないという。

墳頂部から出土する土器の組成も追究され、祭祀用主要三種の解体プロセスを想定して、一号墳―二号墳という編年の序列づけをする。それとともに、祭祀土器のあり方は、関東地方東部の

ものに類似するという。

古墳の築造に関しては、まず古墳の土量計算を行ない、一号墳築造にのべ六三七人を要したのに、これに次ぐ四号墳の作業量は二九三人分にすぎなかったと、差の大きさに着目する。また、例えば一号墳では、築造当初の墳丘からすでに三一パーセントも流失したらしいと想定する。このような土量計算等は、各地の古墳で試みられ始めているが、大いに期待したい部門である。

第五章では、本屋敷古墳群が立地する譜戸川・高瀬川流域の古墳文化の展開過程が概観される。それによれば、この地域では外部の人間の到来によって土師器の使用が始まり、その基盤の上に古墳の築造が始まるという。こうして展開するこの地域の古墳文化は三期に区分される。それによれば、二期には早くも群集墳の形成が始まり、第三期の六世紀前半期には横穴式石室墳が定着をみるという。予想外の早い展開に驚くのは、私だけであるまい。

第六章は文献学的考察だが、現状では「和名抄」記載の郷名比定もままならぬという。だがこの地域を築羽国造の地と考える論者は、国造と丈部との関係を根拠として、その成立期を六世紀後半と推測する。もちろん系譜上築羽国造に先行する本屋敷一号墳の被葬者が、最初に中央と結びつくのだが、それは他の在地首長よりも優位に立つべく、自発的な意志によって、その傘下に加わったと推理している。

第七章は諸考察のまとめともいべき部分である。まず本屋敷古墳群が、立地・築造法・墳形・内部主体・副葬品・供献土器など、すべての属性が四世紀末ないし五世紀初めの前方後方墳の範

疇内にあり、とくに茨城県勅使塚・原一号墳、栃木県茂原愛宕塚、千葉県新皇塚の諸古墳と類縁関係にあると指摘する。

これらから、本屋敷古墳群は東北関東地方との関連において理解されるべきだが、北陸・東海地方とのかかわりも重視しなればならないこと、また東北地方への古墳文化の流入は、予期以上に早かったらしいこと、だがこの地域における首長権の基盤はきわめて不安定だったろうことにも言及されている。

むしろ、責任者の伊藤玄三教授が、むしろ淡々と、主眼であった前方後方墳の具体相を明らかにしえたことを喜ぶ、と述べているのが印象的である。

本書の第一の生命が、本屋敷古墳群の調査報告にあることはいうまでもない。そしてこの部分は、精細な調査の結果が詳しく記述されており、読者が誤った理解をする恐れはほとんどない。もちろん、記述が及ばなかったと思える点がないわけではない。例えば一号墳主体部内埋積土の横断面図から、私どもは木棺のどのような埋置そして埋没過程を考えればよいのか、これだけでは判断に苦しむ。また同じ古墳の前方部石棺と、前方部周堀内出土土器群とが、どのような理由から関連づけられたのか、いまだ少し説明が欲しかった。後述するように、これが事実とすれば、新たな問題を提起することになると思えるからである。

残された紙幅も乏しいので、考察編については一、二の点を抽出してコメントを述べるにとどめざるをえない。

東北地方一円にみる前方後方墳を含む群構成の類型化は、いろ

いろいろな問題を抽出する手がかりとなろうと考える。だがその前提として、各群がどのようにして形成されたのか、換言すれば群を構成する個々の古墳の年代が明らかである必要がある。それ抜きでは、折角の着眼も効果半減の恐れがあると思う。年代が明らかで、しかも相似た類型と考えるものでも、詳細に比較すれば思わぬ差異に逢着することもある。本屋敷古墳群では、一・二・四号墳がほとんど時間差を設けずに相次いで築かれたという。しかも後続する二・四号墳は、一号墳の存在を意識しつつ、その周堀に接するように築いたかみえる。いっぽう同じ四基構成をなす、福島県十九壇古墳群もまた、四号墳を除く三基が五領Ⅱ式期の内で、相前後して築かれたようである。だがこの場合は、前方後方墳と方墳とは、百メートルもの距離をおいて築かれている。この両者にみる群構成原理の差異は無視できないと思うが、両群とも一世代一古墳という、地方の古式古墳群に一般的なパターンをとらない点では共通している。このあたりに東北地方古墳出現期の社会的特質を解く鍵の一つがあるように思えた。また平地に出現する大型前方後方墳が、単独墳の形式をとるという指摘も、右のあり方と対比する中で質の差を見いだしうるのではなからうか。

染羽国造とこの地域の古墳とのかかわりを検証する場合も、地域内首長墓の系列を追う作業を必要としよう。在地首長層がどのような過程を経て国造制に吸収されていったのか知る手がかりを提供する。この地域の古墳・古墳群の概観を踏まえるとき、本屋敷一号↓(藤橋↓)堂ノ森↓宮林という系列がたどれるのか、という点も気になった。それとともに六世紀代以降、前方後円・前

方後方という特殊墳が存在しないらしいことにも、染羽国造出現の特質を見る思いがする。

古墳・古墳群の類型化は、系譜を探る目的もあろうし、年代把握のための場合もあろう。私はそのほかに首長層の成熟度というか、性格をさらに明らかにしてくるのではないかと考える。

この立場から存在形態を類型化するなら、本屋敷古墳群は栃木県山崎古墳群・茨城県安土星古墳群・埼玉県塩古墳群・千葉県飯合作遺跡などに近似すると考えている。

個別的な問題だが、東枕という埋葬様式も興味深い。茨城県のそれは北頭位が一般で、千葉県では東頭位が優越するからである。これなども広く比較検討してみる必要があるであろう。また、一号墳の石棺が引田式期に属するのなら、墳丘上陪葬と考えられているものには、実に一世紀も経過した後のものが含まれる場合があることになる。新たな解釈を加える必要があるだろう。

つぎに土器論の一部をとりあげよう。報告者らは、二号住居址出土土器を中心に、「口縁つまみ出し甕形土器」に着目して、これを北陸系と断じ、富山・新潟方面にその故地を求めた。妥当な見解である。それどころか、従来北陸系といえ、5字口縁が特徴的な石川県の月影式土器などが注目されるばかりであった。研究者の意識の外にあったこの種の土器を土俵に上げた意義は大きい。ただ、私どもが東日本の弥生時代から古墳時代への移行期の土器を扱う場合、いま一つの口縁つまみ出し技法が存在することを注意する。いうまでもなく、庄内甕に代表される土器群にみるものである。したがって「口縁つまみ出し甕形土器」という呼称

は、いまだ少し限定して使用する方が誤解がなくてよいと思う。

それはともかく、当該土器の口唇部外面に、傾斜する面が作出される点も重視してよいだろう。そのほか、本書の記述にある通り、この種の土器の内面は、ヘラナデやハケメ仕上げであって、削られることはない(尤も石川県下に客体的に存在するものには、内面削りを加えたものがあるという)。そのような点を重視すると、長野県柳町の資料は内面に顕著な削りがみられるという(笹沢浩氏教示)から、系譜上問題が残る。いっぽう、長野県城の内遺跡の土器のうち、私どもが第一様式と呼んだグループの甕形土器は、口縁部をヘラで斜めに削って面を作りだしており、小さな平底に至るプロボーション等をも考慮して、私は新潟県方面の系譜につらなると思い続けてきた。もし私の考えが当を得ているとすれば、これらが和泉式併行である点に注目したい。

ところで、本書には数多くの集成表が収録されている。とりわけ巻末の前方後方墳集成は、付図・文獻目録を備える優れたもので、収録古墳数は二六〇基に達する。一九七四年現在の茂木雅博氏の集成が、疑義あるものを含めて一二四基だったことを思えば、この十年間の発見のすさまじさがわかる。したがって本集成表は、ここ当分の間、前方後方墳のインデクスとして多くの人びとに利用されるに違いない。それだけにまた、危惧の念も生じてくる。その第一は、冒頭にことわりはあるにせよ、集成の中に、千葉県日立精機一号墳のように調査者が前方後方墳と断じるのを避けたものや、本村豪章氏の考証にもかかわらず、いまだにそれと断じることをためらう人が多い、神奈川県真土大塚山古墳なども

加えられている。これらは備考欄に注記が欲しいところである。

いわゆる前方後方形周溝墓も集成に加えられている。これには備考欄の注記がある。だがこの種のものには、調査者により評価が分かれる。したがって等質の遺構であっても、調査者によって、前方後方墳と報じられたり、周溝墓に加えられたりするのが現況である。集成者の立場を前面に出す必要があるのではなからうか。

この集成が発表されて僅か一年で、前方後方墳はさらに数を増した。収録洩れもなくはない。またこの種の作業につきまとう、誤植も絶無とはいえない。この集成をより完璧な形に仕上げるべく、補遺・追補などを「法政考古学」あるいは「法政史学」などに掲載していただけることを希望してやまない。ましがいなく学界の共有財産として珍重されるにちがいない。

本書は若手研究者の共同作業によって作成されたものである。しかも、すぐれた調査報告書である。検討された個別の問題を深めつつ、組みあわせる作業を繰り返すことにより、必ずや戸戸・高瀬川流域の古墳時代地域史の叙述が完成するに違いない。それは近世地方史研究の泰斗村上直氏を会長にいたく法政史学の学风をさらにふくらませるだけでなく、考古学界の現況を考えると、きわめて重要な作業であると思うからである。その期待が大きいがゆえに、的外れとも思えるコメントをながながと記してしまった。誤解もあらうが意のあるところを汲み、寛恕されたい。江湖の一読をおすすめする次第である。

〔一九八五年三月刊、非売品、四三九頁、B5判、法政大学刊〕